

史跡・名勝 高台寺庭園

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一八―七

史跡・名勝
高台寺庭園

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 高台寺庭園

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、高台寺小方丈再建計画に伴う史跡名勝高台寺庭園の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成31年3月

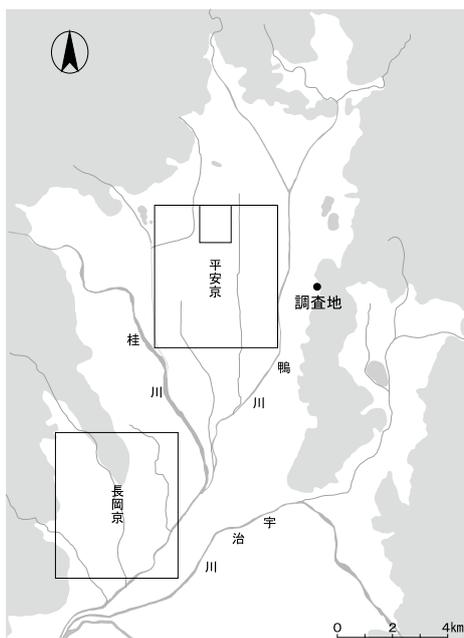
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡・名勝 高台寺庭園 |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区下河原町526番地 高台寺境内 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 高台寺 代表役員 小堀泰巖 |
| 4 調査期間 | 2018年8月8日～2018年10月10日 |
| 5 調査面積 | 約194㎡ |
| 6 調査担当者 | 西田倫子・モンベティ恭代 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」・「岡崎」・「五条大橋」・「清水寺」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 西田倫子 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構	5
4. 遺 物	13
(1) 土器類	13
(2) 瓦類	14
(3) 金属製品	18
(4) 木簡	19
5. ま と め	20

図 版 目 次

図版1	遺構	調査区全景（西から）
図版2	遺構	1 基壇1・雨落溝60（南東から） 2 基壇2検出状況（南西から）
図版3	遺構	1 暗渠70検出状況（東から） 2 暗渠70丸瓦検出状況（西から） 3 暗渠70完掘状況（西から） 4 瓦列1（南東から）
図版4	遺構・遺物	1 断割3遺構検出状況（北東から） 2 暗渠70出土軒平瓦

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（北西から）	2
図3	作業風景（北西から）	2
図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	遺構平面図（1：100）	6
図6	北壁断面図（1：40）	7
図7	東壁断面図（1：40）	8
図8	調査区中央南北ライン・断割2東壁断面図（1：40）	9
図9	基壇1・建物1・雨落溝60実測図（1：80）	10
図10	建物1 据付穴44・75実測図（1：50）	11
図11	暗渠70実測図（1：40）	11
図12	瓦列1・2実測図（1：50）	12
図13	土器実測図（1：4）	14
図14	軒瓦・道具瓦拓影及び実測図（1：4）	15
図15	丸瓦・平瓦拓影及び実測図（1：6）	16
図16	瓦刻印拓影（1：2）	18
図17	金属製品実測図（1：3）	18
図18	木簡赤外線写真（1：1）・釈文	19
図19	平成17年度調査 遺構平面図（1：80）	21
図20	高台寺所蔵古絵図	22
図21	寛政年間再建小方丈規模復元図（1：300）	22

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	13

史跡・名勝 高台寺庭園

1. 調査経過（図1～4）

この調査は、史跡・名勝 高台寺庭園の小方丈再建計画に伴うものである。調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が宗教法人高台寺から委託を受け、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という）と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）の指導のもと実施した。

調査区は、市文化財保護課の指導により、小方丈再建予定地に東西15m、南北13mの長方形に設定し（図4）、2018年8月8日に調査を開始した。調査面積は194㎡である。調査は、江戸時代後期の整地層上面で行った。調査では、江戸時代後期に再建されたと考えられる建物基壇、東石、礎石掘付穴、瓦列などを検出した。また、下層確認のために行った断割部分にて、江戸時代前期の建物に伴う基壇の南辺、瓦列や、江戸時代後期に作られた暗渠などを検出した。検出した遺構は、高台寺・文化庁・府文化財保護課・市文化財保護課の協議の結果、現地で保存されることとなったため、検出した遺構は土層観察用の畦を残し、下層遺構の確認は部分的な掘り下げに留めるなど、遺跡の保存に努めた。

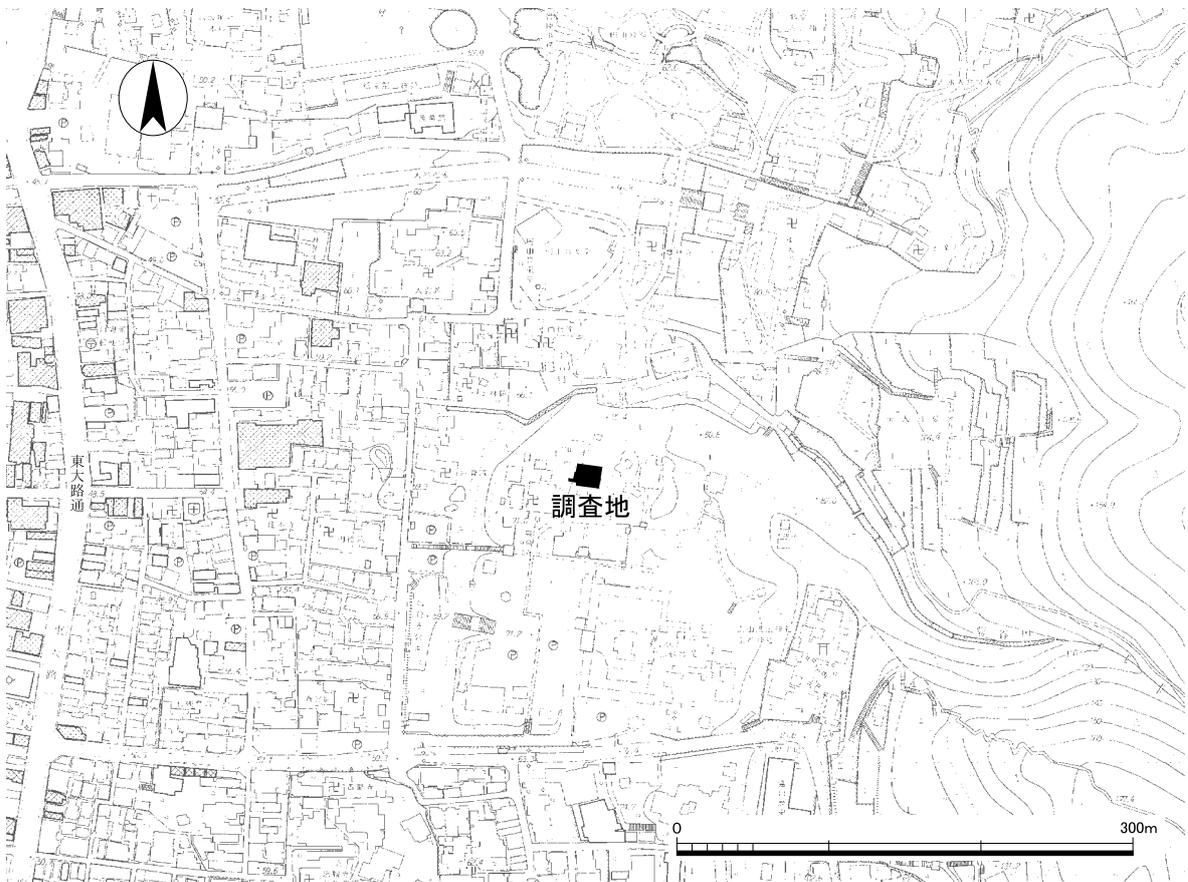


図1 調査地位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（北西から）



図3 作業風景（北西から）

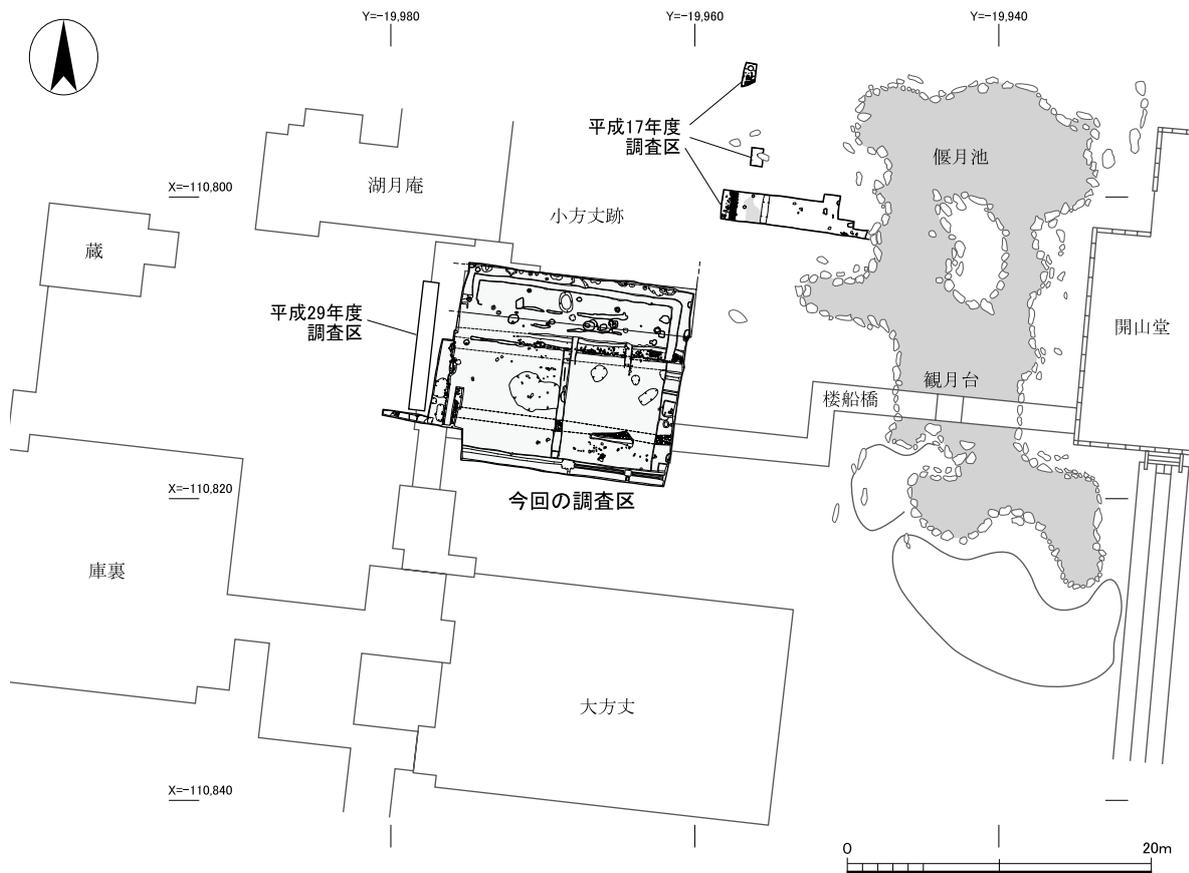


図4 調査区配置図（1：500）

各遺構については記録作業を行い、調査中には府・市文化財保護課の検査指導を受け、10月10日に全ての調査を終了した。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都市東山区下河原町526に所在し、昭和2年(1927)に指定された「史跡・名勝高台寺庭園」にあたり、京都盆地の東、東山丘陵の西側裾部に位置する。境内の北側には、菊溪川¹⁾という谷川が流れる。下河原の地名は、この菊溪川流域の河原地であることに由来している。

平安時代後期から室町時代 当地には、承和4年(837)2月27日、菅野真道が桓武天皇の菩提を弔うため、法観寺(八坂寺)の傍に建立した道場を、子の永岑が寺院に改め、雲居寺が創建され²⁾た。この寺は、何度か焼失するもその都度再興されたが、応仁・文明の兵火により廃寺となったとされる。また、応永33年(1426)10月、細川満元により建立された岩栖院が、高台寺の創建以前まで当地に存在した³⁾。

江戸時代以降 高台寺は、慶長3年(1598)に没した豊臣秀吉の菩提を弔うために、正室・北政所が慶長10年(1605)に建立した寺院である。創建当初は、北政所が1590年代に実母・朝日局のために高德寺町(京都市上京区寺町通御霊馬場)に建立した康德寺を移転したものであった⁴⁾。当地へ移転する際には、寺の領域をめぐり岩栖院との敷地替が行われ、さらに土地の一部が鷲尾氏にとって名字地となる重要な所領であったことなどから、慶長9年(1604)閏8月に西洞院時慶を介して交渉が行われた。そして康德寺が移転されることとなったのは、慶長10年(1605)6月であった⁵⁾。同年9月1日には徳川家康により寺領が安堵され⁶⁾、翌年には、高台寺の伽藍はほぼ体裁を整え⁷⁾た。『山州名跡志』によれば、西向きの門、仏殿、方丈、小方丈、開山堂、霊屋があったとされる⁸⁾。寛政元年(1789)2月9日に火災に遭い、小方丈、庫裏などが焼失している。その後小方丈は、寛政7年に圓徳院にあった北政所の居館を移築し再建したとされる⁹⁾。文久3年(1863)7月26日、高台寺は、松平春嶽の宿舎に予定されたことに不満を持った志士たちにより放火され¹⁰⁾、この際、小方丈も焼失し、明治には仮方丈が建てられた。そして大正2年(1913)に、大方丈は再建された¹¹⁾が、小方丈の地には、北書院が建てられた。

(2) 周辺の調査(図4)

高台寺では、過去に2回の調査が実施され、本調査は3次調査となる。周辺の調査については、『平成17年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報¹²⁾』、『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度¹³⁾』で報告されている。

平成17年度に行った調査については、文久3年に焼失した小方丈の状況と現状の池の変遷を明らかにする目的で、本調査区の北東側で行われた。遺構としては、瓦列・敷石遺構(雨落溝)、礎石を検出した。瓦列・敷石遺構(雨落溝)は、真黒石と呼ばれる黒色の玉石を敷き、瓦列は丸瓦の端面が上になるようにして、敷石を縁取るように立てられていた。小方丈に伴う雨落溝が想定されている。

平成29年度に行った調査については、小方丈再建計画に伴う前存の北書院解体に先行し、基礎掘削深度の情報を得るために、今回の調査区の西側隣接地で行われた。遺構としては、18世紀以降の整地層や高台寺創建期の整地層を検出した。また、遺物としては、平安時代後期から江戸時代後期の土器や瓦などが出土している。

註

- 1) 「京町鑑」『新修京都叢書』第三卷 臨川書店 1969年
- 2) 承和四年二月二十七日条 「続日本後紀」卷第六『新訂増補 国史大系』吉川弘文館 1978年
- 3) 京都市編『京都の歴史』学芸書林 1968～1976年
『京都市の地名』平凡社 1979年
- 4) 田端泰子『北政所おね』ミネルヴァ書房 2007年
- 5) 慶長九年閏八月二日条・慶長十年六月廿七日条・同廿八日条 「時慶卿記」『大日本史料』第十二編之三 東京大学出版会 1902年
- 6) 慶長十年九月朔日 家康安堵状 「高臺寺文書」『大日本史料』第十二編之三 東京大学出版会 1902年
- 7) 慶長十一年条 「當代記」『大日本史料』第十二編之三 東京大学出版会 1902年
- 8) 「山州名跡志」卷二『新修京都叢書』第十五卷 臨川書店 1969年
- 9) 「京都坊日誌」下卷廿二學區乃部『新修京都叢書』第二十一卷 臨川書店 1970年
- 10) 菊池 明『京都守護職日誌 第一卷』新人物往来社 2008年
- 11) 註9) に同じ。
- 12) 「史跡 高台寺庭園」『平成17年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 13) 「IV-4 高台寺境内（雲居寺跡） No.15」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6・7)

調査地の現地表面は、標高71.7～71.9mで、なだらかに南西に向けて傾斜している。基本層序は、 $X = -110.811$ を境にして南北で異なっており、北側と南側それぞれについて述べる。

北側では、現地表面から0.1mが現代盛土、その下に江戸時代後期基壇構築土（北壁16層、東壁13層）が最大0.2mの厚さで存在する。その下には、江戸時代前期基壇構築土（北壁17・18層、東壁15層）がある。江戸時代前期基壇構築土については、断割り調査を行っていないため厚さは不明である。一方、南側では、現地表面から0.1mが現代盛土で、その下に明治・大正時代の造成土（東壁2層）が約0.2m存在し、その下に江戸時代後期の整地層（東壁5・8層）が最大0.3m、江戸時代前期の整地層（東壁14層）が0.1m程堆積している。さらにその下に黄褐色細砂を主体とした地山（東壁22層）があり、その上面の標高は69.95～71.2mである。

(2) 遺構 (図5～12、図版1～4)

調査区の平面形は、東西方向に長い長方形（南北13m×東西15m）とし、南西部に遺構確認のため拡張部（南北6m×東西1m、南北0.5m×東西3m）を設けた。

調査は、江戸時代後期の整地層上面で行った。また、3箇所を断ち割り（断割1～3）、下層の確認を行ったところ、江戸時代前期の遺構面を検出した。以下では、江戸時代前期、後期の遺構に分けて述べる。

江戸時代前期

基壇2 (図版2-2) 断割1・2内で検出した基壇の南辺部である。後述する江戸時代後期の基壇1南辺より1.5m南で検出した。基壇南辺には、にぶい黄褐色の均質な砂が敷かれており（東壁14層）、化粧砂の可能性が考えられる。

溝72 断割1内で検出した東西方向の溝である。江戸時代前期の整地層を掘り込んで造られている。断割外に続く。幅0.2m、検出長は1m、深さ0.05mである。

瓦列2 (図12、図版4-1) 断割3内で検出した南北方向の瓦列である。瓦溜81や暗渠70などにより壊されており、4枚の丸瓦を検出したのみであるが、後述する瓦列1から0.5m東に並行して造られている。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
江戸時代前期	基壇2、溝72、瓦列2
江戸時代後期	基壇1、建物1、雨落溝60、整地層、暗渠70、瓦列1、土坑71、瓦溜81

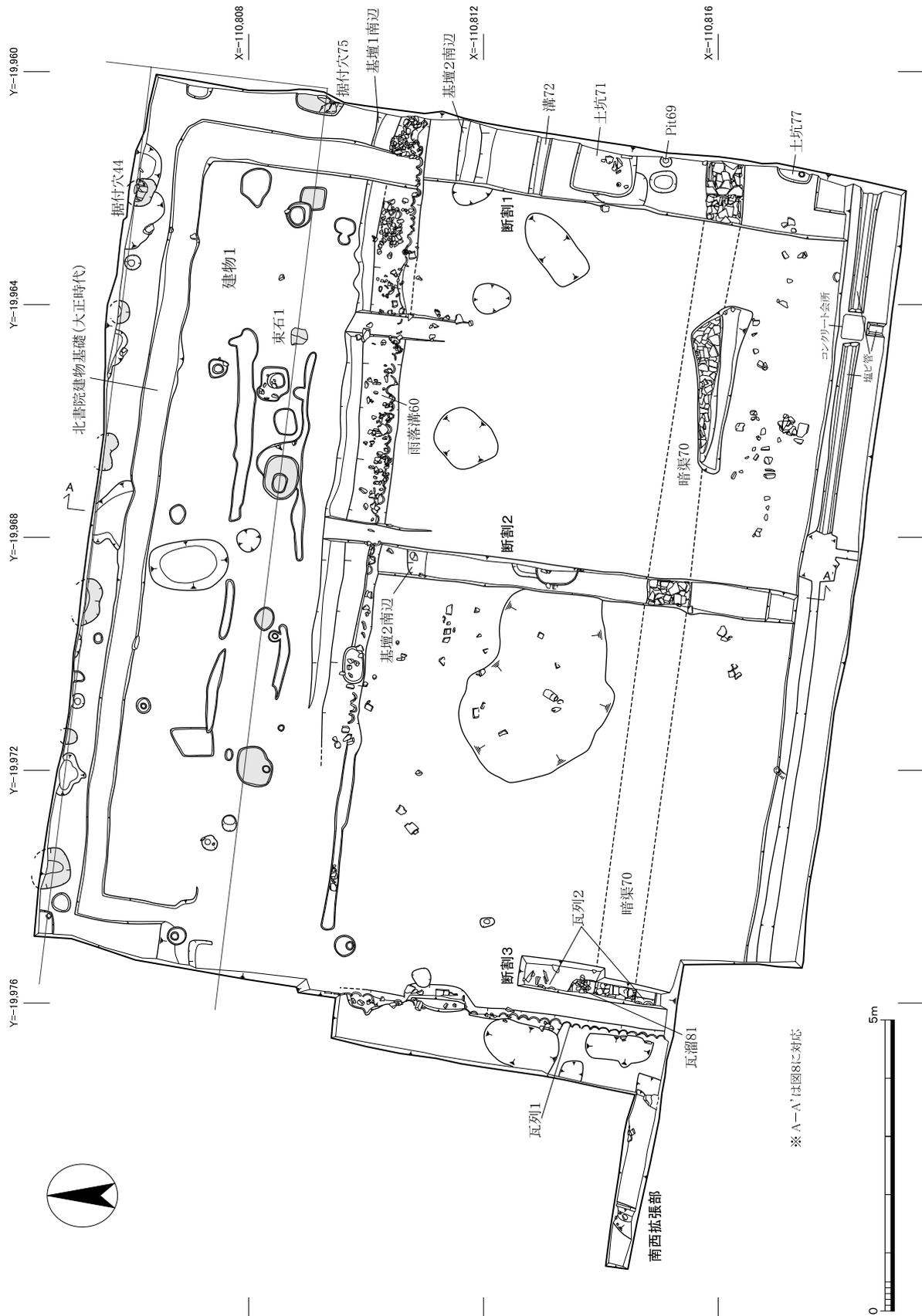
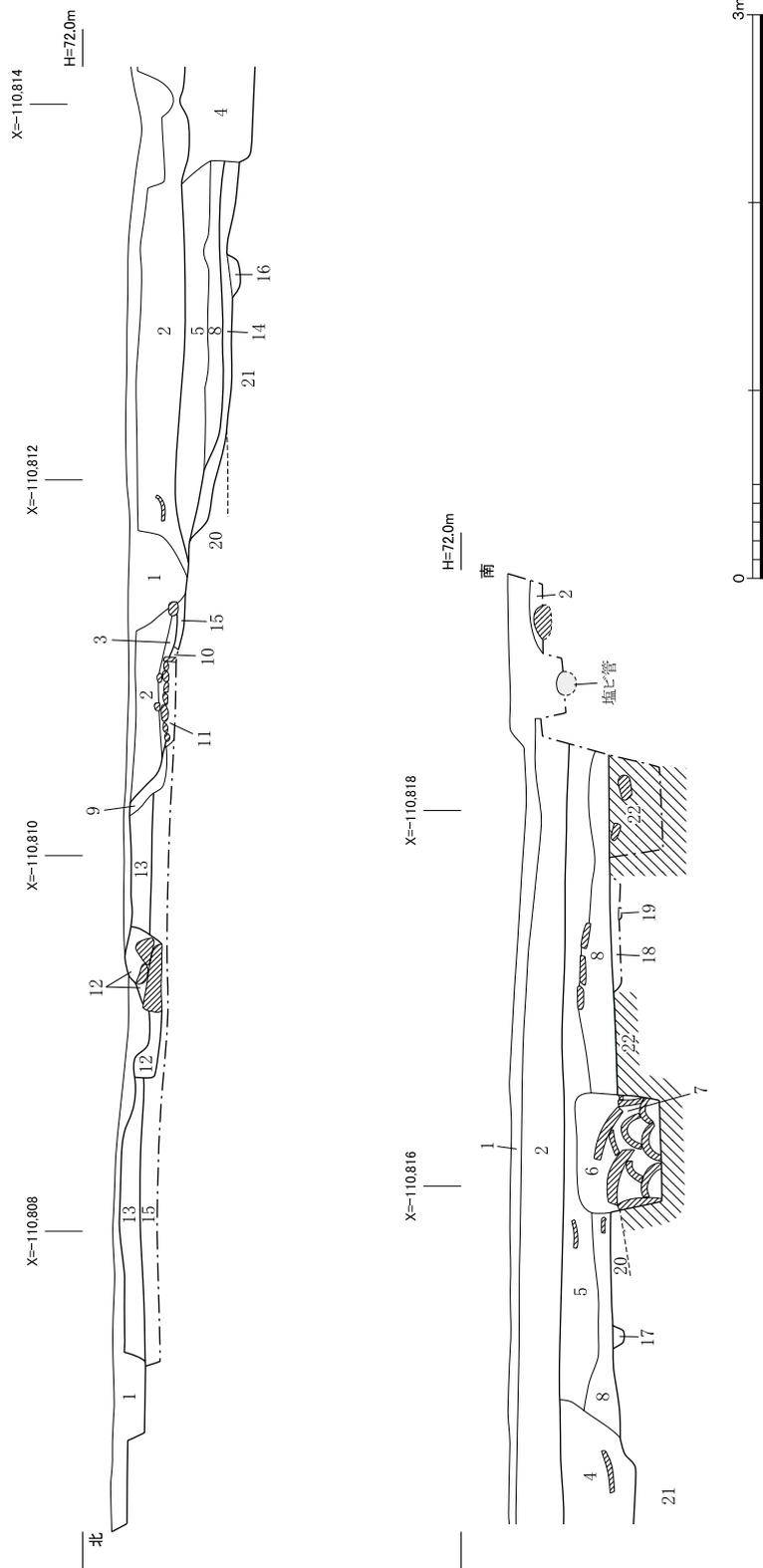
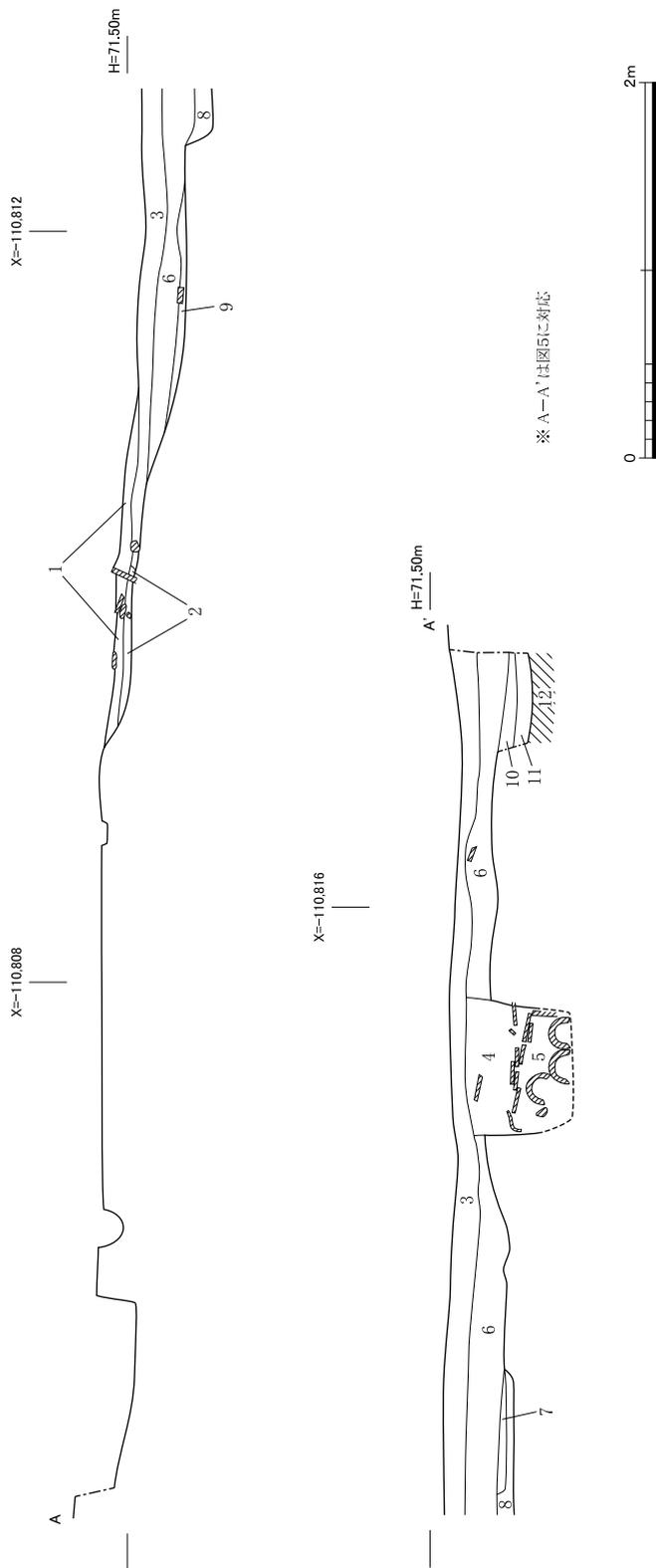


図5 遺構平面図 (1 : 100)



- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR4/3にぶい、黄褐色粗砂～細砂 シルトブロック含む(表土)</p> <p>2 7.5YR4/3褐色粗砂～細砂 φ～10cmの礫少量含む(明治・大正時代造成土)</p> <p>3 10YR4/3にぶい、黄褐色細砂～シルト粘質 炭含む</p> <p>4 7.5YR4/6褐色粗砂～細砂粘質 φ5～10cmの礫少量含む
瓦・陶磁器片含む 最下層に炭多量含む(土坑71埋土)</p> <p>5 7.5YR5/6明褐色粗砂～シルト粘質 瓦・炭含む(江戸時代後期の整地層)</p> <p>6 10YR4/4褐色粗砂粘質 φ5cmの礫多量含む</p> <p>7 10YR4/6褐色粗砂～シルト φ3cmの礫含む (暗渠70埋土)</p> <p>8 10YR4/6褐色粗砂～細砂粘質 10YR5/1褐色粘土ブロック含む(江戸時代後期の整地層)</p> <p>9 10YR4/6褐色粗砂～細砂 φ0.5cmの礫含む(江戸時代後期の基壇化粗砂)</p> <p>10 7.5YR5/6明褐色粗砂～シルト粘質 (雨落溝60埋土)</p> <p>11 10YR4/2灰黄褐色粗砂～シルト粘質</p> | <p>12 10YR4/6褐色粗砂 5YR5/6明褐色ブロック含む 花崗岩を据える(据付穴75埋土)</p> <p>13 7.5YR3/4暗褐色粗砂～細砂 5YR2/4極暗褐色焼土・炭含む(江戸時代後期の基壇構築土)</p> <p>14 10YR5/4にぶい、黄褐色粗砂粘質(江戸時代前期の基壇化粗砂)</p> <p>15 7.5YR5/6明褐色粗砂～細砂 2.5Y3/1黒褐色粘質シルトブロック含む(江戸時代前期の基壇構築土)</p> <p>16 10YR5/4にぶい、黄褐色粗砂粘質(溝72埋土)</p> <p>17 7.5YR5/6明褐色粗砂～シルト粘質(Pi69埋土)</p> <p>18 7.5YR5/6明褐色粗砂～シルト粘質 (土坑77埋土)</p> <p>19 10YR6/4にぶい、黄褐色粘質土</p> <p>20 7.5YR5/6明褐色粗砂～粗砂粘質 φ1cmの礫多量含む
φ1cmの2.5YR3/6暗赤褐色シルトブロック少量含む</p> <p>21 7.5YR5/6明褐色粗砂～粗砂粘質 φ1cmの礫多量含む</p> <p>22 10YR5/8黄褐色粗砂～シルト φ10cmの礫多量含む 固く締まる(地山)</p> |
|---|---|

図7 東壁断面図 (1:40)



- 1 10YR5/4にぶい、黄褐色粗砂～細砂 φ3cmの礫含む
- 2 10YR4/4褐色細砂～シルト 炭を含む(文久3年火災後盛土)
- 3 7.5YR5/6明褐色粗砂～シルト 粘質 φ5～10cmの礫を少量含む 瓦・炭含む(江戸時代後期の整地層)
- 4 10YR4/4褐色粗砂 粘質 φ5cmの礫多量含む
- 5 10YR4/6褐色細砂～シルト φ3cmの礫含む (暗渠70埋土)
- 6 10YR4/6褐色粗砂 粘質 10YR5/1靑灰色粘土ブロック含む(江戸時代後期の整地層)
- 7 10YR4/4褐色細砂～シルト 粘質 炭を含む(土坑73埋土)
- 8 7.5YR5/6明褐色粗砂～粗砂 粘質 φ1cmの礫多量含む
- 9 10YR5/6黄褐色細砂～シルト φ0.3cmの礫含む 10YR5/6黄褐色細砂ブロック含む(江戸時代前期の基礎化粧砂)
- 10 10YR4/4褐色粗砂～細砂 粘質 φ0.3～1cmの礫含む
- 11 7.5YR5/6明褐色シルト 粘質
- 12 10YR5/8黄褐色細砂～シルト φ10cmの礫多量含む 固く締まる(地山)

図8 調査区中央南北ライン・断割2東壁断面図(1:40)

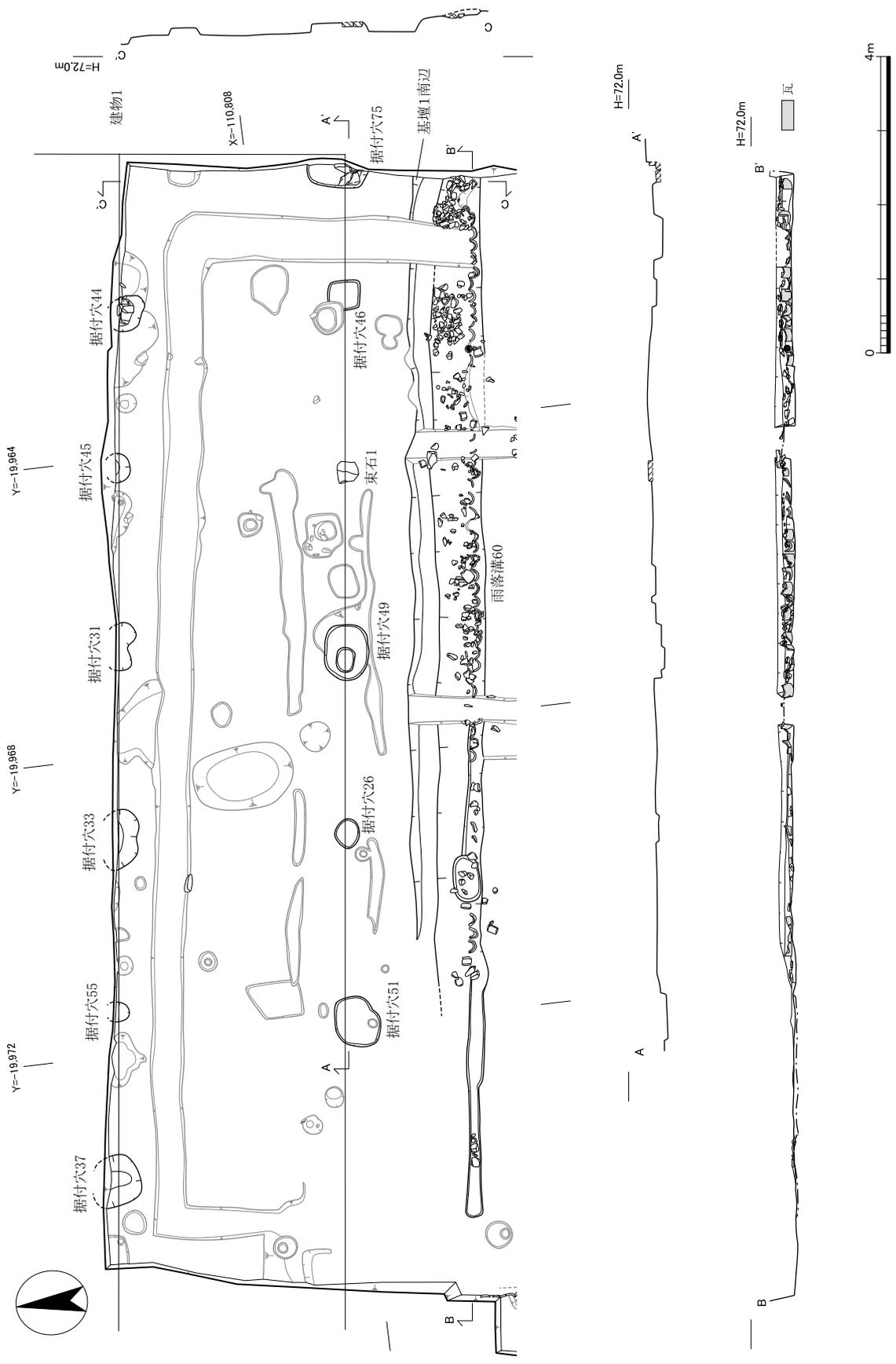


图9 基壇1・建物1・雨落溝60実測図(1:80)

江戸時代後期

基壇 1 (図9、図版2-1) 現代盛土直下で検出した。調査区の北側約1/3が基壇であり、北端から5mの地点で、基壇の端を確認した。南西部は攪乱のため、削平されている。基壇上面の標高は71.8mである。基壇構築土には焼土や炭を多く含む。

建物 1 (図9・10、図版2-1) 基壇1上面で検出した東西棟の礎石建物である。南側に縁が付く。礎石は残存せず、据付穴東西5

間分を検出したが、縁の西側部分は攪乱を受け不明である。柱間は2.4mで、縁の幅は3.3m前後と推定される。縁部分では東石1を検出した。東石は長辺24cm、厚さ4cmで、花崗岩の割石を用いている。同質の石材を使用した根石を建物部分の据付穴44と縁部分の据付穴75で検出している。

据付穴44は、平面形が楕円形で、長辺1m×短辺0.3mである。内部には、根石の30cm大と10cm大の花崗岩が詰められ、10cm大の花崗岩の下から刀子が出土した。30cm大の花崗岩は被熱を受けた痕跡が見られた。いずれも上面は平らである。埋納遺構の可能性も考えられる。据付穴75は、花崗岩の割石が詰められており、検出した石材は、30cm大と50cm大の上面が平らなものである。

雨落溝 60 (図9、図版2-1) 基壇1の南側に並行して検出した溝である。溝を掘削後、2～4cm大の石を南北0.5m幅で敷き詰め、南端に広端を上にした丸瓦を立て並べている。

江戸時代後期整地層 (図7・8) 整地層は上下2層に分かれ(図7-5・8層、図8-3・6層)、江戸時代前期の遺構を覆い最大で0.1m整地した後、後述する暗渠70を造り、さらに最大0.1m整地を行ったものである。この層からは、18世紀中頃の陶器や二次被熱が認められる丸瓦なども出土している。

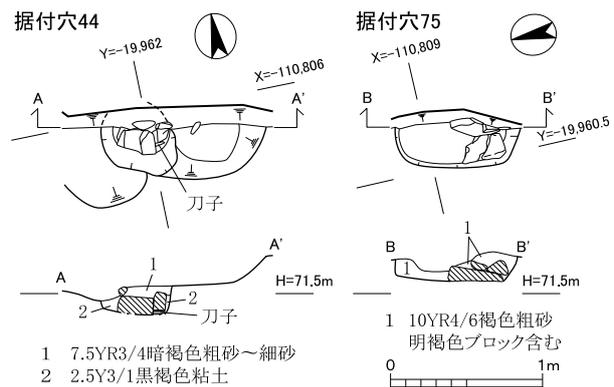


図10 建物1 据付穴44・75実測図(1:50)

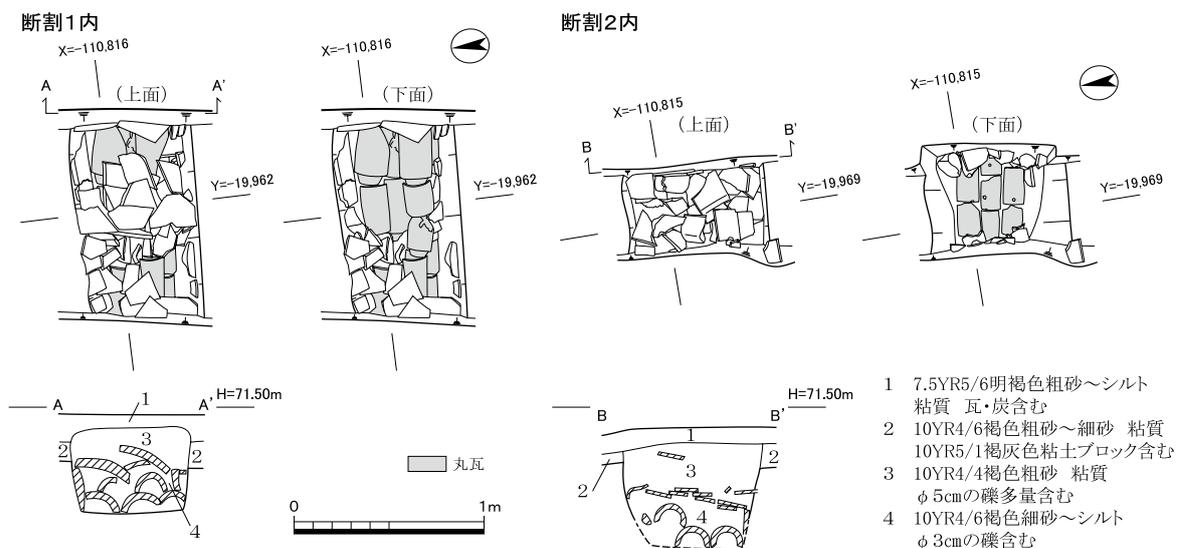


図11 暗渠70実測図(1:40)

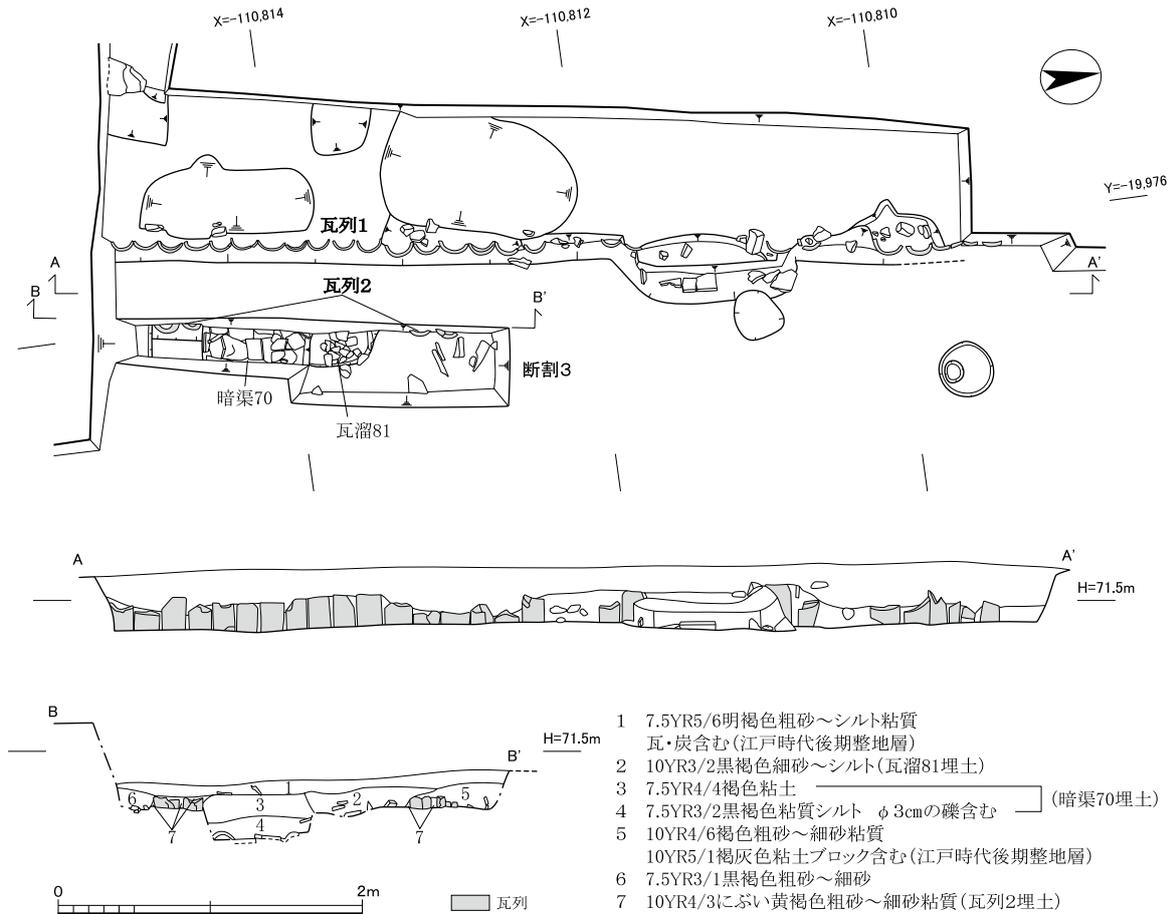


図12 瓦列1・2実測図(1:50)

暗渠70(図11、図版3-1~3) 調査区南部断割内、攪乱内にて検出した。東西溝で、幅0.6~0.7mである。前述の通り、江戸時代後期の整地層下層を掘り込んで溝を構築し、底部に丸瓦を3列敷き、その間をまたいで上に丸瓦を2列敷き、その上に平瓦片を敷きつめ、さらに土を被せて暗渠を構築していた。断割1と断割2内の丸瓦上面で高低差を確認したところ、西が0.2m低く、約7°の傾斜で西へ水を流していたことがわかった。

瓦列1(図12、図版3-4) 調査区の南西部で検出した。丸瓦の広端を上にして並べ、土留めとした遺構である。南側は調査区外に広がる。北側は基壇1へ接続する可能性が考えられるが、攪乱のため不明である。検出長は5.6mである。瓦列の西側で土留めされた土の上面は固く締まっており、基壇1とほぼ同一レベルの71.54m前後である。基壇面に続く面を形成していたことが想定される。

土坑71 調査区南東部断割1内で検出した。東側は調査区外に広がる。江戸時代後期の整地層上面から掘り込まれる。平面形は、調査区外に広がるため不明だが長方形を呈すると考えられる。検出した一辺は1mである。埋土から江戸時代の土器・瓦が多く出土し、底部には大量の炭が含まれ、廃棄土坑と考えられる。

瓦溜81(図12) 断割内にて検出した。江戸時代後期の整地層下層を掘り込んで構築される。南北4m以上、東西22cm以上である。遺構検出にとどめたため、深さは不明である。

4. 遺 物

調査では整理コンテナにして17箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品がある。瓦が大半で、土器・陶磁器類は少数である。遺物の時期は、主に江戸時代である。鎌倉時代・室町時代の遺物もわずかに出土している。

以下では主要な遺構から出土した遺物について種別ごとに概要を述べる。

(1) 土器類 (図13)

室町時代以前の土器 (1・2)

1は瓦器碗である。復元口径13.0cm、残存する器高は2.3cmである。和泉型。外面はオサエで、内面に粗いミガキを施す。基壇構築土下層より出土した。2は輸入磁器の青磁碗である。小片のため、口径・器高などは不明。外面は蓮弁文に櫛描文、内面は劃花文を配する。基壇1の上面より出土。その他にも、小片のため掲載していないが、江戸時代後期の整地層から京都Ⅷ期の土師器皿¹⁾が出土している。高台寺創建以前に当地に存在したとされる雲居寺、岩栖院に関する遺物の可能性がある。

江戸時代の土器

土坑71出土土器 (3～6) 3～6は施釉陶器である。3は口径10.2cm、器高6.6cm。4は口径10.5cm、器高6.2cm。3・4共に淡黄色の釉を施し、高台は削り出す。京・信楽系で、18世紀中頃である。5は口縁9.5cm、器高5.2cm、全面に灰白色の釉を施し、口縁から内面にかけて、一部鉄釉と青色の釉を施す。6は底径4.0cm、残存高4.9cm、浅黄橙色の釉を施し、外面体部に鉄釉による回転模様が施される。5・6は19世紀初めと考えられる。

江戸時代後期整地層出土土器 (7～10) 7～9は施釉陶器である。7は口径10.1cm、器高5.2cmで、京・信楽系の半筒碗いわゆる煎じ碗である。体部下半部が斜めに開き、口縁部は直立する。立ち上がりは短く、鉄絵と白化粧土による模様が施されている。見込に目痕が残る。高台は削り出

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
鎌倉時代 ～室町時代	瓦器、青磁		瓦器1点、青磁1点		
江戸時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付磁器、瓦類、金属製品		土師質土器1点、施釉陶器9点、瓦類28点、金属製品2点		
明治時代以降	金属製品、木簡		金属製品2点、木簡1点		
合 計		22箱	45点 (5箱)	17箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

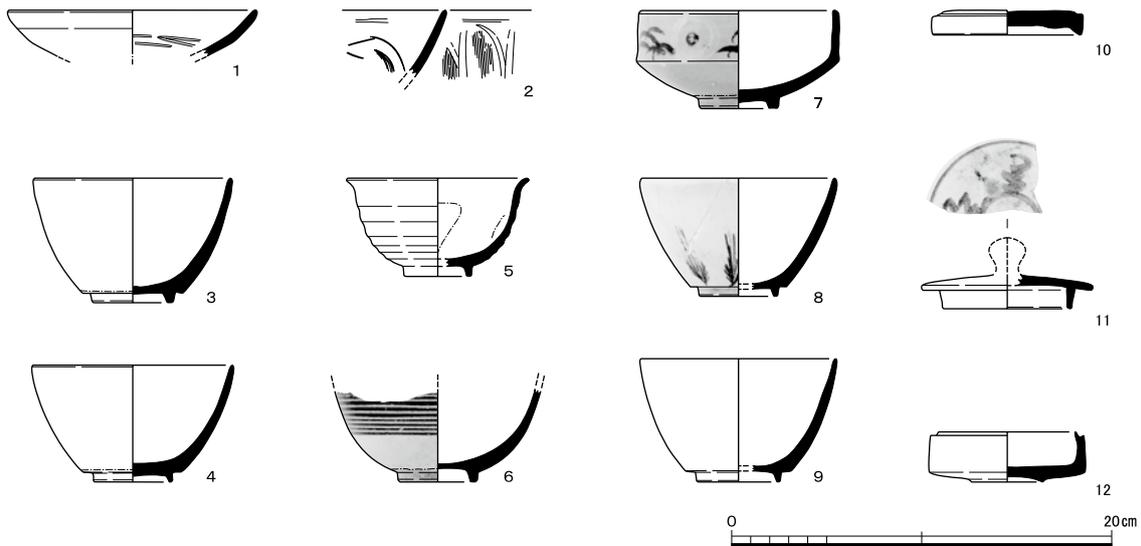


図13 土器実測図（1：4）

し。18世紀中頃に比定される。8は口径10.1cm、器高6.3cmの京・信楽系の椀で、いわゆる小杉椀である。全体に淡黄色の釉が施され、体部に鉄釉と呉須で二株の松が描かれる。若松文が簡略化されているものの、信楽焼の牧9-2号窯で見られる模様と類似し、18世紀中頃に比定される²⁾。9は口径10.2cm、器高6.5cmの京・信楽系の椀である。灰白色の釉が施される。8・9は共に高台が削り出し、同法量のため、同時期と思われる。10は焼塩壺蓋である。口径7.7cm、器高1.3cmである。ロクロ回転ナデが内外にみられる。

明治・大正時代造成土出土土器（11・12） 11・12は施釉陶器である。11は復元径6.7cm、蓋物の蓋。全体に灰白色の釉が施され、摘み部分を囲むように鉄釉と緑色の釉で文様が施されている。京・信楽系。12は口径7.0cm、器高2.8cmの合子の身。灰白色の釉が施されている。京・信楽系。いずれも19世紀中頃である。

（2）瓦類（図14～16、図版4-2）

瓦はすべて江戸時代のものであり、大半が江戸時代後期の整地層、暗渠70より出土した。丸瓦・平瓦が多く、軒丸瓦3点、軒平瓦7点、軒棧瓦10点、鬼瓦1点がある。また、刻印のある瓦が22点ある。

軒丸瓦（図14 瓦1～3） 軒丸瓦はすべて三巴文である。残りが悪く、同文確認は難しい。瓦1は左巴文で、尾は互いに離れる。珠文を配す。明治・大正時代造成土出土。瓦2は右巴文に珠文を配す。瓦3は左巴文で珠文を配す。尾は互いに離れる。瓦2・3は江戸時代後期の整地層出土。瓦1・2が軒平瓦4とほぼ同時期と考えられる。

軒平瓦（図14、図版4-2 瓦4～9） 軒平瓦は、いずれも均整唐草文である。瓦4は中央に五葉文を配し、左右に2回転の唐草文を配する。この文様は、豊臣秀頼が寄進した相国寺法堂の瓦とされるもの³⁾と同文で、淀城跡出土のもの⁴⁾と酷似する。また、瓦当上縁の中央に幅広の面取りを呈し、瓦当面と平瓦接合部に強い横ナデ、平瓦凹面は丹念に横ナデしている。また、相国寺の現、法

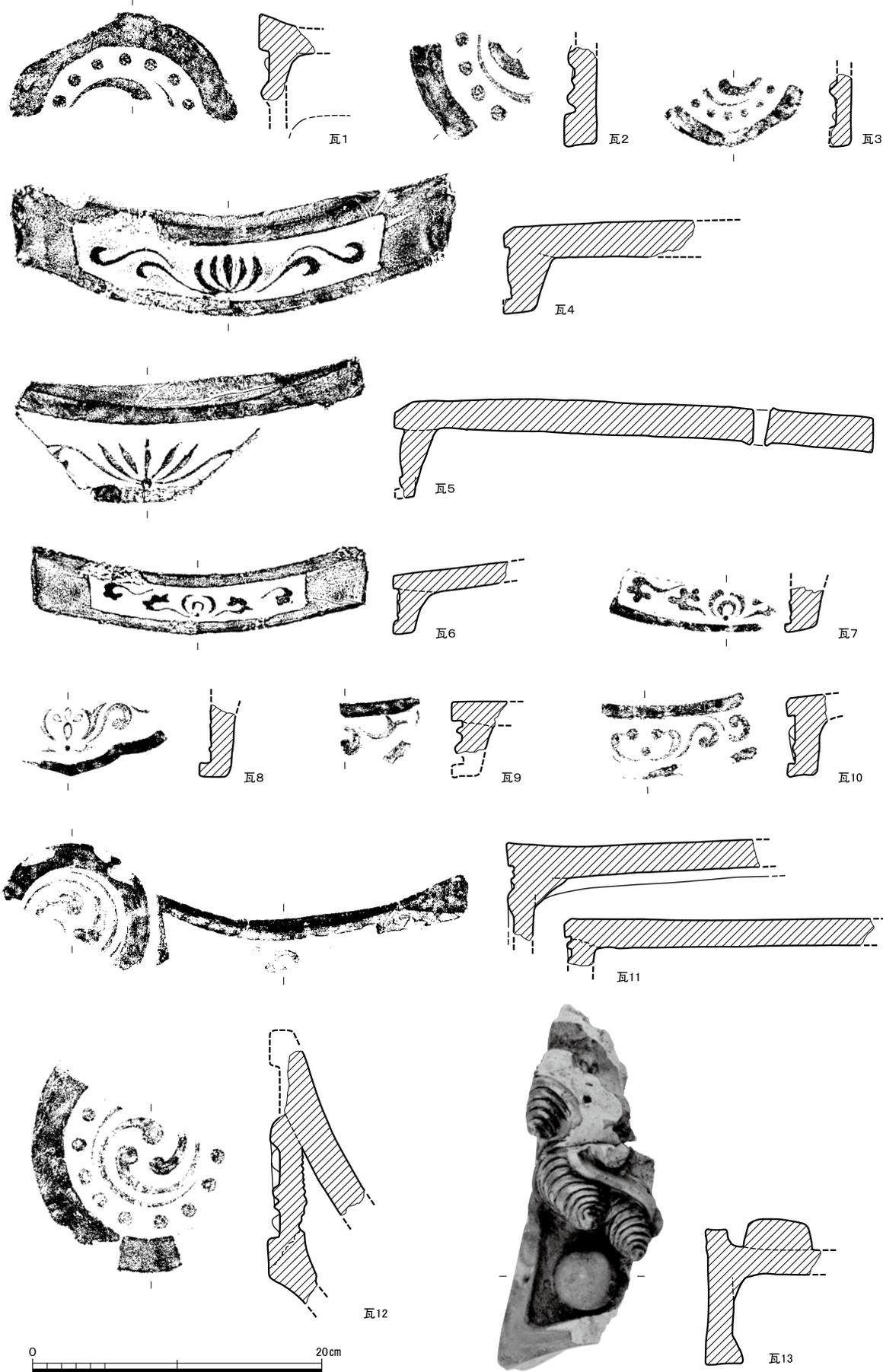


图14 軒瓦・道具瓦拓影及び実測図（1：4）

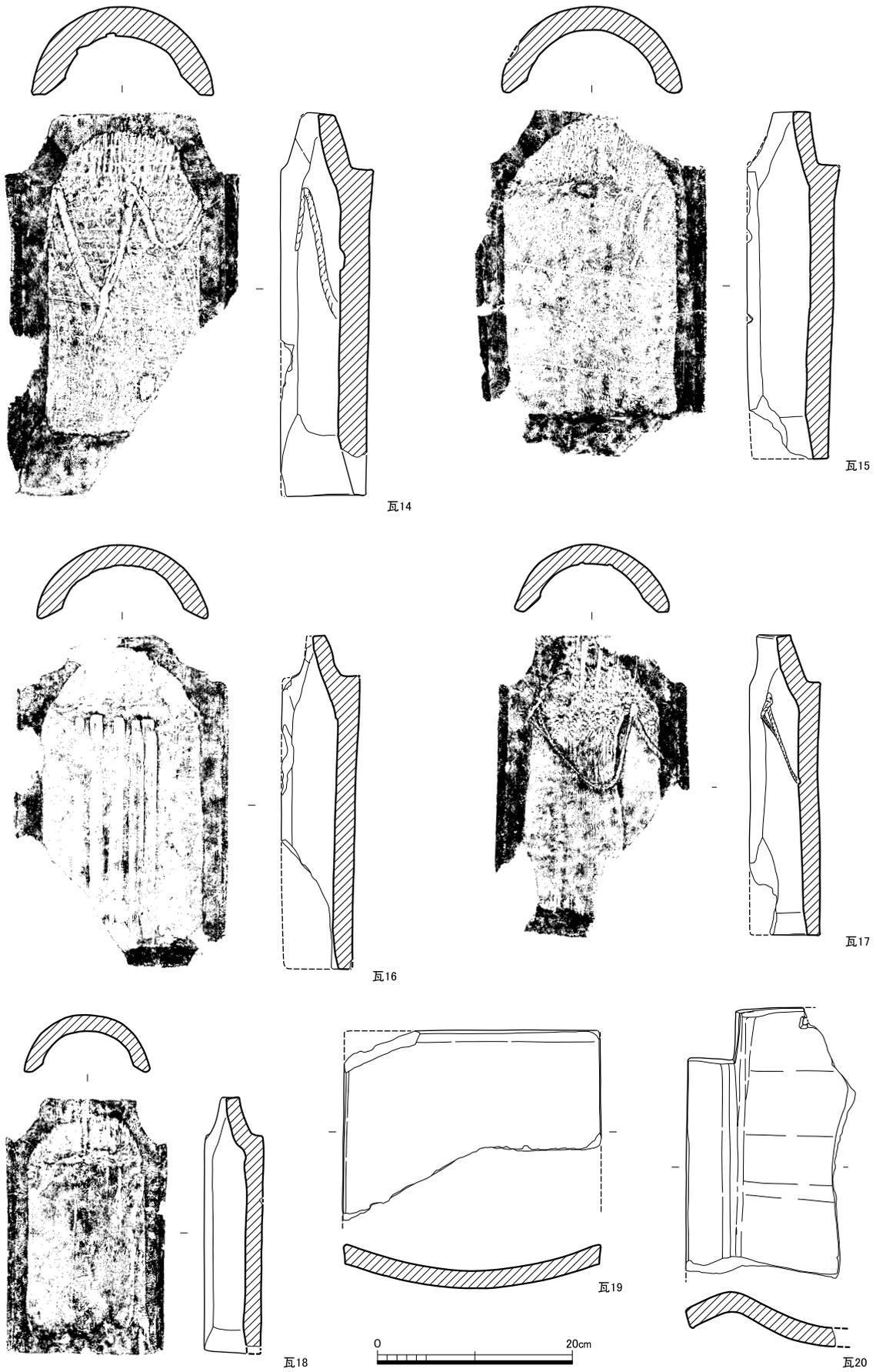


图15 丸瓦・平瓦拓影及び実測図（1：6）

堂が慶長10年建立とされることから、この軒平瓦は、江戸時代前期つまり、高台寺創建時に使用された瓦と考えられる。瓦5は中央に五葉文を配し、左右に唐草文を配する。顎の形状から瓦4より新しい時期の可能性はある。瓦6は凸型均整雲形唐草文。瓦当面にキラコを施す。顎部凸面と顎部裏面は横ナデを施す。瓦7は凸型均整雲形唐草文。顎接合面に横方向のカキメを施す。6・7は同文異範であり、妙心寺庫裏修理の際に見つかっている軒平瓦と同文であると考えられ、17世紀から18世紀頃のものと考えられる⁵⁾。これらの軒平瓦はすべて暗渠70で出土している。瓦8・9は均整唐草文の滴水瓦である。瓦当面にキラコを施す。19世紀である。いずれも明治・大正時代造成土から出土している。

軒棧瓦 (図14 瓦10・11) 瓦10は均整唐草文。軒棧平瓦部のみが残る。江戸時代後期の整地層出土。瓦11は小丸瓦当が左三巴文で、尾は離れる。平瓦部瓦当は立浪文か。菱形に折松葉の刻印を押捺する。また、平瓦部瓦当文様区が小丸瓦当によって隠されている。平部瓦当裏面移行部に強い横ナデの痕跡、凸面に離れ砂がみられる。平瓦部瓦当上縁並びに右脇縁は面取りが施されている。一部に二次被熱がみとめられる。暗渠70出土。

道具瓦 (図14 瓦12・13) 瓦12は鳥衾瓦である。左三巴文で尾は離れる。外区に珠文を施す。瓦当面にキラコを施し、瓦当内面には全面にカキメが施されている。土坑71から出土している。

瓦13は鬼瓦である。珠文の部分と三連の髭が残る。江戸時代後期の整地層から出土している。

丸瓦 (図15 瓦14～18) 瓦14～16は暗渠70に使用された瓦である。瓦14は狭端幅18.0cm・長さ39.5cm、玉縁幅10.5cm・長さ6.0cmある。成形は、凹面に鉄線切り離し痕跡が付く。布目残り、吊り紐痕跡が付く。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部から狭端部は横ナデである。胎土は砂粒を含む。焼成は硬質。瓦15は狭端幅18.0cm以上・長さ35.9cm、玉縁幅9.0cm以上・長さ5.5cmある。成形は、凹面に鉄線切り離し痕跡が付く。布目残り。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部から狭端部は横ナデである。胎土は砂粒を含む。焼成は硬質。二次被熱を受け、色調はにぶい橙色を呈する。瓦16は狭端幅15.5cm・長さ34.5cm、玉縁幅7.5cm以上・長さ4.2cmある。成形は、凹面に鉄線切り離し痕跡が一部残り、棒状工具による刺突痕が付く。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施し、中央部に刻印がある。玉縁部は横ナデである。胎土は砂粒・小礫を含む。焼成は硬質。瓦17は狭端幅15.5cm・長さ31.1cm、玉縁幅8.0cm以上・長さ4.8cmある。成形は、凹面にナデが施されるが、一部に布目残り。吊り紐痕跡が付く。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデを施す。玉縁部は横ナデである。胎土は砂粒・小礫を多く含む。焼成は硬質。雨落溝60の上を覆う層から出土している。瓦18は広端幅13.4cm・長さ26.5cm、玉縁幅7.0cm・長さ4.0cmある。成形は、凹面は縦ナデされ一部鉄線切り離し痕跡が残る。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデを施す。玉縁部は横ナデである。胎土は砂粒・小礫を多く含む。焼成は硬質。二次被熱がみとめられ、色調は灰黄色を呈する。江戸時代後期の整地層出土。

平瓦 (図15 瓦19) 瓦19は幅26.5cm、長さ19.7cm以上、厚さ1.8cmである。成形は粘土板1枚

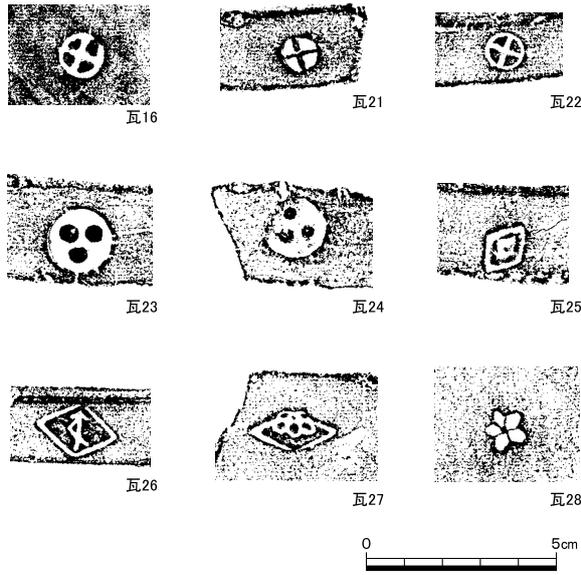


図16 瓦刻印拓影（1：2）

花文」がある。軒平瓦（1点）、丸瓦（4点）・平瓦（13点）、棧瓦（3点）、軒棧瓦（1点）にみられる。刻印は、丸瓦は狭端部凸面部、平瓦は端面部分に施されたものが大半である。明治・大正時代造成土、江戸時代後期の整地層、暗渠70から多く出土した。

（3）金属製品（図17）

金属製品は、明治・大正時代造成土や据付穴44から出土した。

金1は鉄製刀子である。刀身は9.5cm以上。棟は3.7cm、目釘孔が1つ穿たれている。刃渡は5.3cm以上。片刃である。据付穴44の根石の下から出土した。金2は火箸の持ち手部分である。長さ6.5cm、径0.6～0.8cmで、下端に0.35cmの孔を穿つ。孔に箸部が挿されていたと考えられる。上端は宝珠状

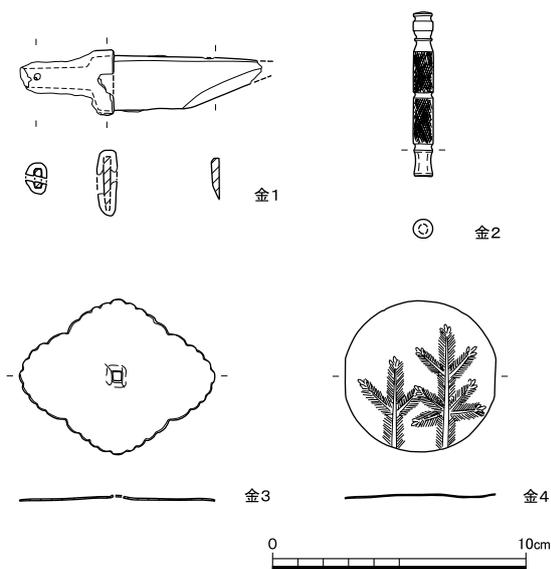


図17 金属製品実測図（1：3）

作りである。凹面は横ナデ、両側縁部と側面は縦ナデを施す。凸面には離れ砂が付着する。両側縁・広端面の内面にヘラで面取りを施す。胎土は砂粒・小礫を含む。焼成は硬質である。暗渠70で使用された瓦である。

棧瓦（図15 瓦20） 瓦20は棧瓦で、幅17.4cm以上、長さ28.0cm以上、厚さ1.9cmである。凸面に離れ砂が付着する。尻部に釘孔、切り込みがある。谷部の凹凸面には縦ナデを施す。暗渠70に使用された瓦である。

刻印瓦（図16 瓦16・21～28） 刻印瓦は9種類、22点である。「○に十字」・「○に三星」・「二重◇」・「◇折松葉」・「◇花」・「五弁

に加工され、中央部には2段にわたって格子状の模様が刻まれる。江戸時代後期の整地層上面から出土した。金3は銅製の釘隠しで、縦6.2cm、横7.7cm、厚さ0.5mmである。花菱の形で、表面には上にさらに装飾された釘隠しが重ねられた痕跡がみられる。金4は銅板で、縦6.0cm、横5.9cm、厚さ0.5cmである。松の彫金が施されている。用途は不明。5.9cm幅の板から切り出されたと考えられ、左右の外形に基の材の幅とみられる真っ直ぐな部分が存在する。釘穴などが見られず、何かにはめ込んで使用されたものと想定される。金3・4は明治・大正時代造成土出土。

(4) 木簡 (図18)

長さ9.0cm以上、幅1.5cm、厚0.6cmの加工された木片である。表・裏及び一側面の三面に文字が書かれている。また、記載の日付に31日とある⁶⁾ことから、太陽暦が採用された明治5年以降に書かれたものと考えられる。明治・大正時代造成土から出土した。



図18 木簡赤外線写真 (1 : 1)・積文

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年に準拠する。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

- 2) 畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 2003年
 3) 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2008年
 4) 伏見城研究会刊『器瓦録想 其の三 淀城』真陽社 2007年
 5) 註3)に同じ。
 6) 積読については、京都大学名誉教授西山良平氏・京都産業大学教授吉野秋二氏よりご教示いただいた。

5. ま と め

高台寺は、慶長10年（1605）に豊臣秀吉の菩提を弔うために北政所により建立された寺院である。各史料から、調査地付近に小方丈が建てられたと考えられる。この建物が寛政元年（1789）に焼失したため、新たな小方丈として、圓徳院より北政所が日常使用していた建物を移築し再建した。文久3年（1863）に再度焼失し、仮方丈が建立される。これにかわって大正年間には北書院が建てられた。今回は、北書院解体後の調査となっている。以下、周辺で実施された調査とあわせて発掘調査成果をまとめる。

今回の調査

検出した主な遺構は、江戸時代の建物に伴うもので、時期は江戸時代前期と後期の2時期に分かれる。高台寺所蔵の絵図などから、いずれも高台寺小方丈に関連すると考えられる。江戸時代前期の遺構は、基壇南辺・瓦列、江戸時代後期の遺構は、基壇・礎石建物・雨落溝・暗渠などがある。

江戸時代前期 遺構は、基壇2・溝72・瓦列2である。基壇2は、断割調査において調査区中央付近で東西方向に走る段差として検出した。段差部分が基壇の南端にあたり、高台寺に当初創建された小方丈の遺構と考えられる。溝72は、断割2では検出されず、性格が不明であるが、基壇を構築後に掘り込んで作られ、基壇構築土化粧砂が埋土にみられることから、基壇構築に先行する遺構と推定される。瓦列2は、断割3のみで検出し、暗渠70や瓦溜81などに削平されており、全容は明らかではないが、江戸時代後期の瓦列1とほぼ同じ位置に、江戸時代前期の高台寺創建期から同様の瓦列が存在したことがわかる。

江戸時代後期 遺構は、基壇1・建物1・雨落溝60・整地層・暗渠70・瓦列1・土坑71・瓦溜81である。基壇1・建物1・雨落溝60は、調査区北側で検出した。基壇1は焼土を含む土で構築されており、江戸時代前期建物が寛政元年の火災により焼失したのちに、基壇2の上に盛土して構築されていることがわかった。また、基壇1南縁が基壇2より北へ1.4mの位置にあることから、再建時に基壇の場所を北へ移動したか、もしくは規模が小さくなったと推測される。建物1は、基壇1の上に建つ建物で、雨落溝60はそれに伴うものである。調査区の南半部で検出した江戸時代後期の整地層は、上下2層にわかれるが、いずれも18世紀代の土器類と共に焼けた瓦や焼土が大量に含まれていることから、基壇1・建物1の前面を整えた整地層と考えられる。暗渠70は、建物1の前面に広がる空閑地（中庭）の排水施設と考えられ、江戸時代後期の整地層（下層）を掘り込んで設置される。これらの遺構は、寛政元年焼失後に圓徳院から移築・再建された小方丈関係のものと考えられる。なお、暗渠70に利用されていた瓦の中には、江戸時代前期の軒平瓦、二次被熱が認められる瓦などがある。軒平瓦の中には、慶長10年に豊臣秀頼により再興された相国寺法堂に使われたものと同文のものがあり、高台寺創建期の瓦と理解できる。

文久3年小方丈は再び焼失しているが、今回の調査ではその後に建立された仮方丈に関する遺構は検出できなかった。しかし、雨落溝60に敷き詰められた石は、上面が炭を多く含む層に覆われており、寛政年間再建の建物が焼失し、その後盛土されていることがわかった。

今回の調査では、高台寺創建の前段階を示すものとして、若干の遺物は出土したものの、顕著な遺構は見つかっていない。しかし、調査区の西側隣接地で行われた平成29年の調査では、平安時代後期の土師器皿を多量に含む造成土を確認しており、雲居寺・岩栖院に関係する遺構の可能性も指摘されている。

平成17年度の調査（図4・19）

周辺の調査でも述べた通り、調査区の北東部、偃月池西側の調査では、小方丈の雨落溝と考えられる遺構と古絵図（図20）に記載される書院の礎石と考えられる方形の石を検出している。雨落溝は、完形の丸瓦の広端が上になるように立て、南北方向に一直列に並べ、その瓦列の西側に拳大の川原石を60cm幅で敷き詰めた遺構である。一方、礎石はチャートで一辺15cmである。雨落溝に使用された江戸時代前期の丸瓦には、今回の調査でも出土した、五弁花文の刻印が施されたものがみられた。

小方丈の復元

① 平成17年度の調査で検出した雨落溝は、今回検出した雨落溝60と同じもので、それぞれ建物1の東辺部と北東隅部に相当すると考えられる。従って、建物1すなわち、寛政年間再建小方丈の基壇の南北規模（雨落溝間）が約18mである事が明らかとなった。

② 高台寺には、古絵図（図20）が残されており、平成17年度の調査では、古絵図の開山堂西側にある池の汀と小方丈の北東部、書院に当たる部分を調査したこととなる。また、古絵図と今回

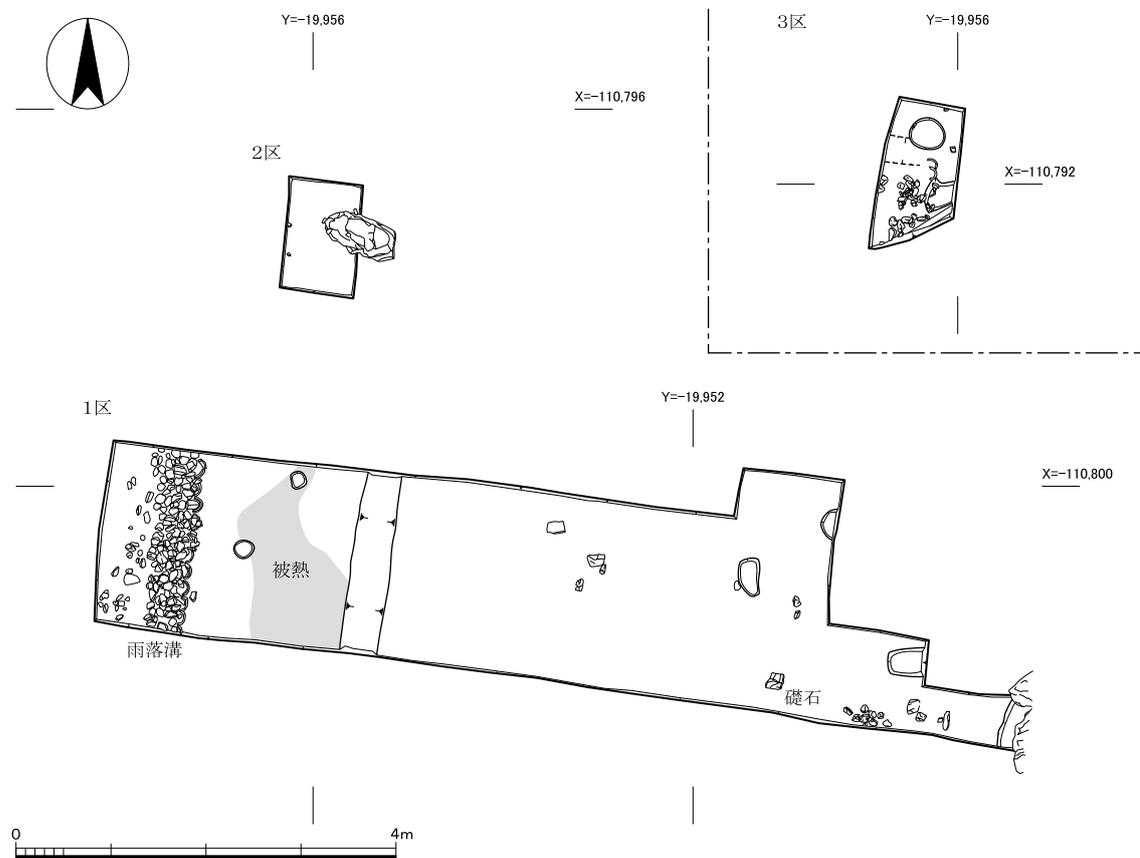


図19 平成17年度調査 遺構平面図（1：80）

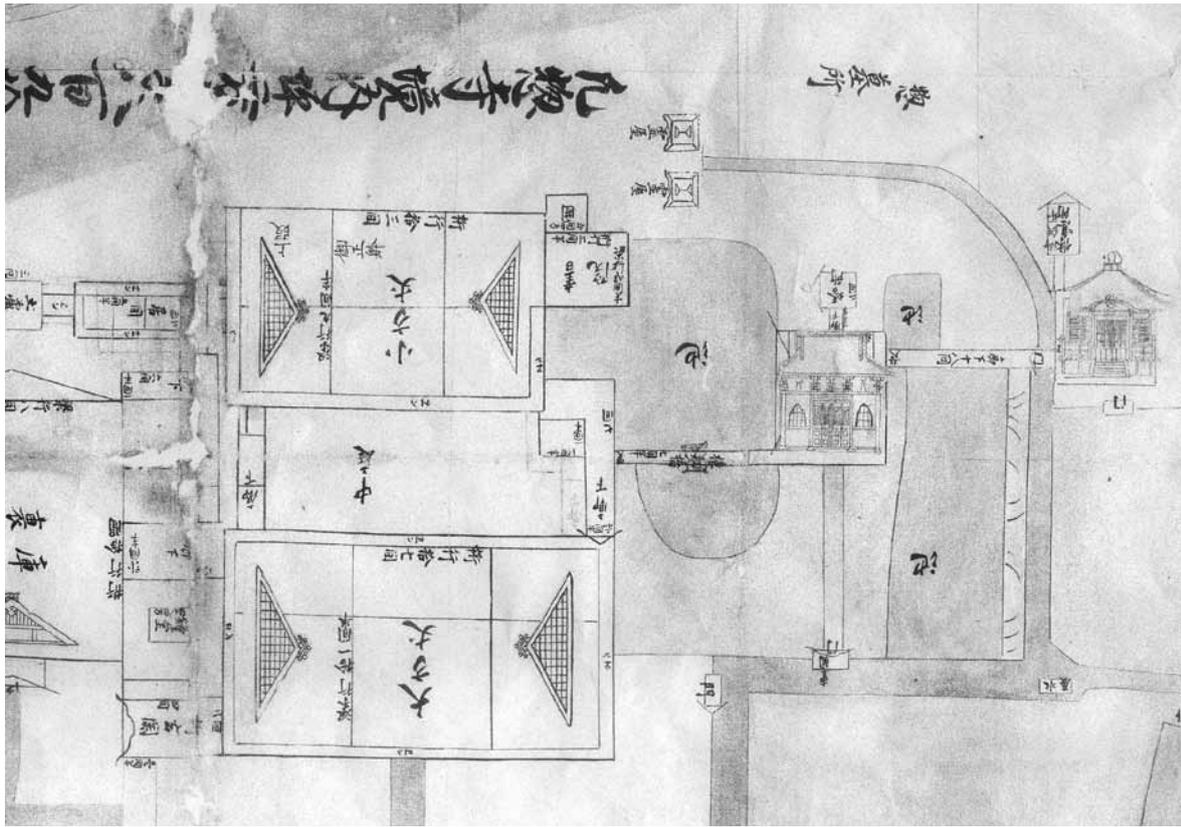


図20 高台寺所蔵古絵図

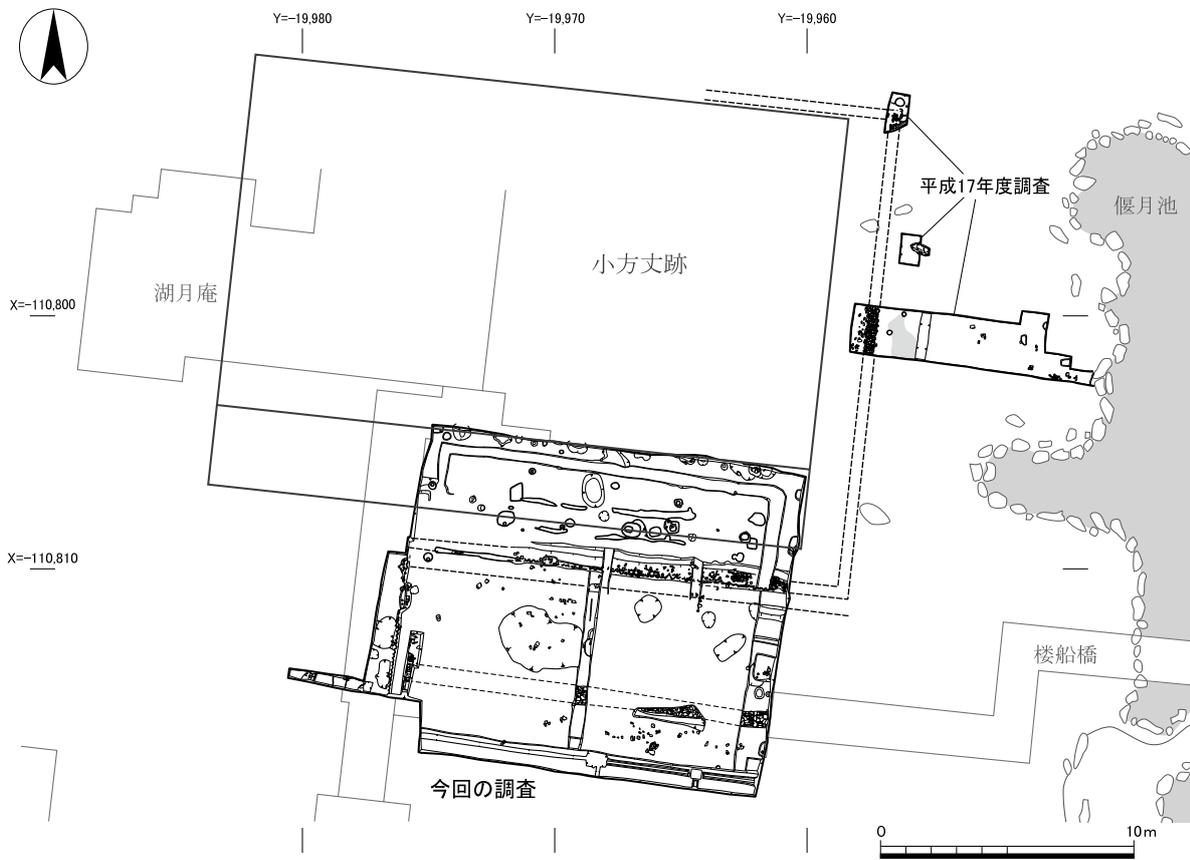


図21 寛政年間再建小方丈規模復元図 (1 : 300)

検出した遺構を比較してみると、絵図に描かれる小方丈の南端と、中庭の部分、基壇1やその上に建つ建物1がよく一致している。

③ 古絵図の建物規模、桁行13間、梁行9間半を参考とし、1間を1.8mとして復元すると、東西約23.4m、南北17.1mとなり、今回の建物南北規模とほぼ合致することがわかった。さらに古絵図では、小方丈と大方丈を結ぶ廊下の部分が描かれる。今回検出した瓦列1は、多少位置はずれるがそれに相当する可能性が高い。または、瓦列1上面が基壇1とほぼ同一レベルの71.54m前後であることから、基壇面に続く面を形成するために造成されたと考えられる。

今回の調査で、創建期の基壇南端を確認できたことにより、寛政年間再建小方丈の南北規模が判明したことは、大きな成果となった。しかし、高台寺の歴史的事実態を把握するにはさらなる調査が必要である。今後の調査により、明らかとなることを期待したい。

圖 版



調査区全景（西から）



1 基壇1・雨落溝60（南東から）



2 基壇2検出状況（南西から）



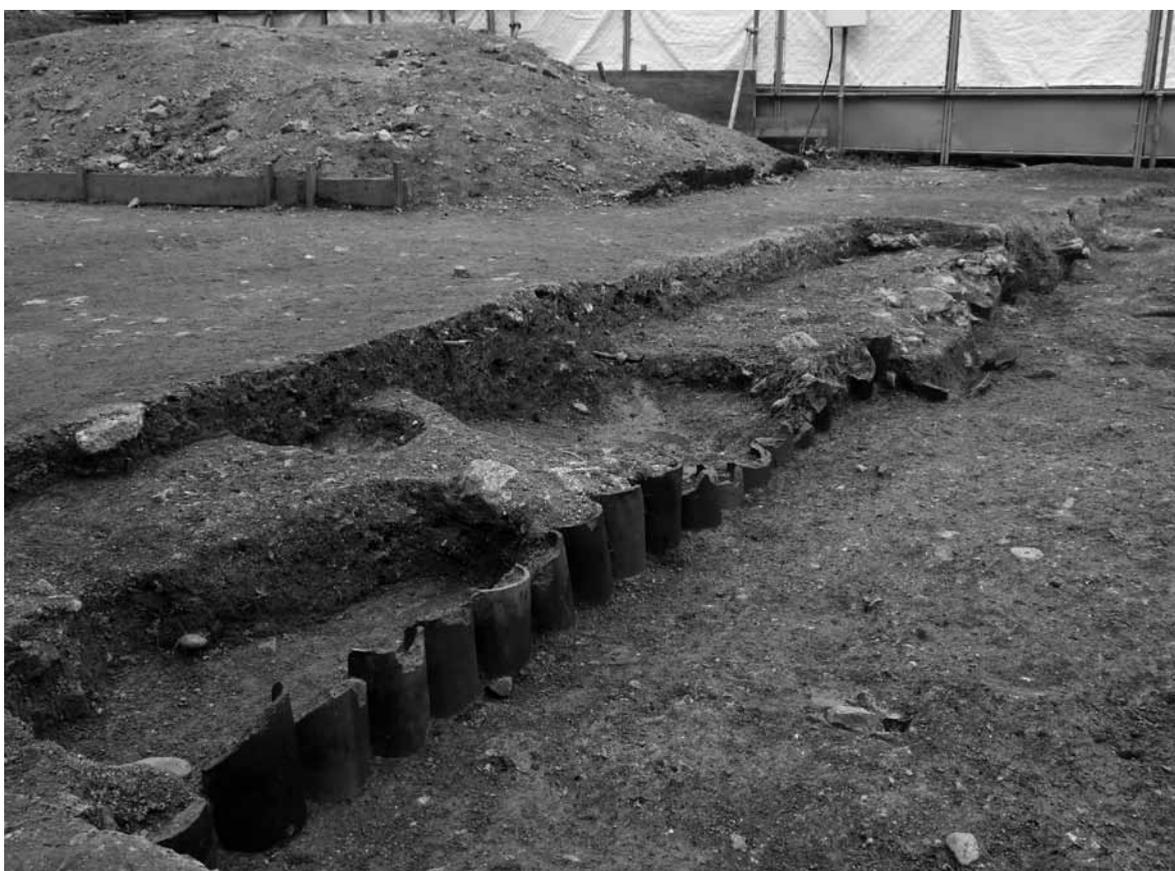
1 暗渠70検出状況（東から）



2 暗渠70丸瓦検出状況（西から）



3 暗渠70完掘状況（東から）



4 瓦列1（南東から）



1 断割3遺構検出状況（北東から）



瓦5



瓦6



瓦4

2 暗渠70出土軒平瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう こうだいじていえん							
書名	史跡・名勝 高台寺庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-7							
編著者名	西田倫子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 こうだいじていえん 高台寺庭園	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 しもかわらちょう 下河原町526 ばんち 番地	26100	A501	35度 00分 03秒	135度 46分 52秒	2018年8月 8日～2018 年10月10日	194㎡	小方丈 再建計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 高台寺庭園	史跡 名勝	江戸時代前期	基壇、溝、瓦列	土師器、土師質土器、 施釉陶器、焼締陶器、 染付磁器、瓦類、金属 製品		創建時の基壇の南 辺、瓦列を検出し た。 寛政年間に再建さ れた小方丈の基壇、 柱列、礎石、礎石 据付穴、雨落溝、 暗渠、瓦列を検出 した。		
		江戸時代後期	基壇、建物、雨落 溝、瓦列、整地層、 暗渠、土坑					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-7

史跡・名勝 高台寺庭園

発行日 2019年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961